

「初代保護林 白髪山天然ヒノキ(遺伝資源)希少個体群保護林」は、四国山地の中央、吉野川上流に位置する高知県本山町内にあります。江戸時代までの天然ヒノキの利用の歴史を経てなお残る美林として、大正四年十月に、保護林制度に基づいて学術参考保護林に指定されました。

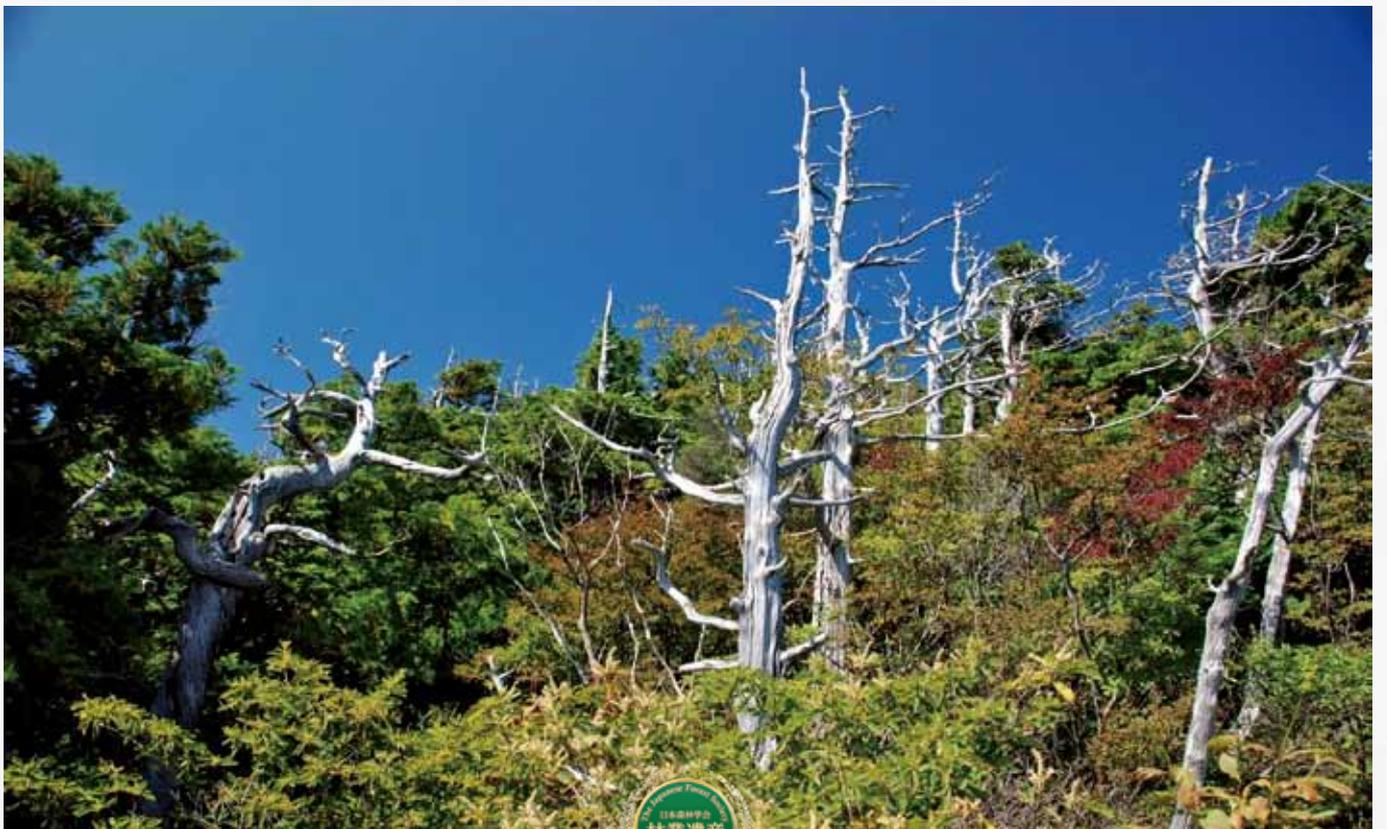
国有林野事業では、自然公園法の前身である国立公園法(昭和六年)や文化財保護法の前身である史跡名勝天然記念物法(大正八年)の制定に先駆け、独自の制度として、大正四年に保護林制度を発足させて以来、時代に合わせて制度の見直しを行いながら保護林の適切な保護・管理に努めています。

白髪山天然ヒノキ林は、制度発足初年度に指定された五箇所のうち、現在も指定区域が唯一変わっていない保護林であり、その歴史、景観、希少性等から、平成二十九年に高知県内三番目の林業遺産として認定されました(なお、保護林制度の見直しが平成三〇年四月に行われるまでは、白髪山天然ヒノキ林木遺伝資源保存林の名称となっていました)。

かつて、この一帯には莫大な量の天然ヒノキがあり、安土桃山時代には、長宗我部氏が豊臣秀吉に白髪山の松材や松皮、帆柱を土佐名物の一つとして献上した記録が残っています。

長宗我部氏に替わり、江戸時代に土佐藩を治めるようになつた山内氏も、幾度も江戸に木材を献上した記録が残っています。一方で、相次いで幕府から掛けられる課役(普請)は、藩内における事業経営とともに大きな負担となり、山内氏は、上方商人からの借銀によって藩の経営をやり繰りしていましたが、その借財が累積し、財政は早くも急迫しました。

元和八(一六二二)年、執政の野中直継は、藩主山内忠義の命を含み、上方商人に借銀返済に三年の猶予を



日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう!

第21回 初代保護林 白髪山天然ヒノキ(遺伝資源)希少個体群保護林

四国森林管理局

得た上で、財政を立て直すため白髪山の良材伐採に着
手します。材木は吉野川を利用して阿波領(徳島県)へ、
さらに大坂へ船で運送販売されました。その結果、借
銀をわずか三年で払い終え、さらに余銀を蔵へ収め、

藩の財政は安定したということです。
さらに、土佐藩は幕府の許しを得て、大坂に木材市
場を開設。上方の木材商人は白髪山の松材を「独特ノ
香リアリ、材質緻密光沢優レ他ノ檜材トハ比ベモノニ
ナラズ」と絶賛したそうデ

す。立売堀川、西横堀川に
設けられた市場は大いに
賑わい、「白髪橋」といつた
地名が、その名残であると
言われています。

一方、明暦三(一六五七)年の江戸大火に際し、藩主
山内忠義の公文書に「杉や松はなく、御公儀より注文
が来てもお望みの木品を差し上げられない」とあるよ
うに、藩内外の木材需要の拡大により山林資源の減少
も憂慮されるようになります。土佐藩は、森林資源を、
財源としてのみならず、水源保護や防風防砂、魚つき
のためにも重要であると考え、山林資源の保護政
策として、輪伐、留山、留木の制度を導入することも、
植林を奨励し、森林経営を行いました。

現在、白髪山の北斜面には樹齢二〇〇〜二五〇年の
ヒノキが生長し、ツガやヒメコマツと混成し、シャク
ナゲなどの下層植生とともに優れた天然生林の景観
を呈しています。最も特徴的なヒノキ林は、山頂南側
付近の風により立ち枯れたと思われる数千本の白
骨林であり、自然の厳しさを感じさせてくれます。

また、八反奈路(はつたんなろ)と呼ばれる場所では、ヒノキの巨木
が存在し、ヒノキの根が「たこ足状」に広がった根下
がりヒノキを見ることが出来ます。

四国森林管理局といたしましては、四国のほぼ中央
に位置しアクセスが良く、白髪山(国有林)を含む山々
へ年間を通じた登山者があることから、地域と連携し
たPR(昨年は土佐れいほく博が実施)や、登山道の整
備等を実施し、より多くの方に足を運んで頂けるよう
取り組みを進めながら、貴重な財産である白髪山の保
全管理に努めてまいります。

(参考文献)

- 堅田一郎(一九六八)「土佐の森林および林業老」林野
弘済会高知支部
- 平尾道雄(一九五六)「土佐藩林業経済史」高知市立市
民図書館



① 上空からみた白髪山。蛇紋岩地帯で針葉樹が多い
② 幹の途中から気根が出たヒノキ。ヒノキでここまで気根が発達することは珍しい
③ 根で合体しているヒノキ。下には歩道がある
④ 根下がリヒノキ

